

君津市立八重原小学校



1 学校の紹介

(1) 学校の概要及び学校教育目標

本校、八重原小学校は、創立127年目を迎える歴史ある学校である。昭和40年代には、八幡製鉄君津製鉄所（現新日鐵住金君津製鉄所）の進出に伴い、児童数が急激に増え、一時は1000人以上の児童が在籍していた。現在は、全校児童282名、14学級の中規模校である。



学校教育目標は、

創立127年目の挑戦

21世紀を切り拓く ゆたかに かしこく たくましい児童の育成
～やっぱり八重原 大好き八重原 みんなそろって八重原小～

である。この学校教育目標のもと、「好きにさせること そろえることに拘りを持って」教育活動に取り組んでいる。

(2) 図書館教育のねらい

図書館教育・運営においても、本を、読書を「好きにさせる」ことに拘りを持ち、読書教育を通じて「相手の気持ちが変わり、感謝の気持ちを持つ子」、「進んで勉強し、一生懸命学習に取り組む子」の育成をねらいとしている。

また、このねらいは、以下の思い・願いがその礎となっている。

読書は、自分では知りえない人の生き方や人の気持ち、また、様々な存在を教えてくれる。相手の気持ちを想像できるようにするために、様々な本を読むことは大切である。

「与えられたもの」で学習するのではなく、自分の考えをさらに高めるために自分に必要な情報は何かを考え、追求できる子に育てたい。そのために、図書館の利用の仕方を知り、様々な本を手にし、本の価値を児童が理解していくことが重要である。

※本校の教育諸計画における「図書館運営計画」より

2 自校の図書館の現状および児童の読書意欲について

本校の図書館は、第1図書室と第2図書室の二教室からなっている。

蔵書数は約11,455冊である。また、市の事業の一環として、移動図書館・ひ



まわり号が、月に2回から3回ほど、巡回にくる。児童一人あたりの年間貸出冊数は、平成25年度が35.6冊であるのに対して、平成26年度が52.5冊と、大幅に増加した。今年度（平成27年度）も、1月現在で48.1冊となっている。ここ数年間の年間貸出冊数の増加は著しく、読書が好きな児童も増えてきている。

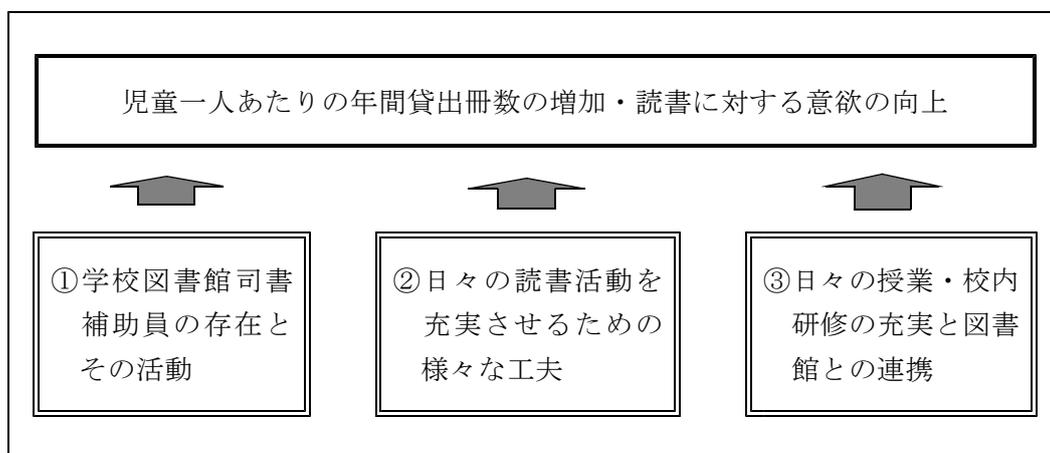
第1図書室の様子

※全国学力学習状況調査・児童質問紙における「読書は好きですか」との問いに対し、平成26年度・27年度、ともに約60%の児童が「当てはまる」で回答をした。これは、県平均（約48%）や全国平均（約49%）を大きく上回る数値であった。

3 年間貸出冊数の増加 及び 読書に対する意欲の向上に関する分析

上述したように、本校の児童一人あたりの年間貸出冊数は、著しく増加をした。また、読書に対する関心や意欲もここ数年で高まってきている。これらは具体的な数値からも証明されている。

では、いったいなぜ、このような増加及び向上が見られたのだろうか。その要因は、大きく分けて3点あると分析した。※下記図参照



一点目は、「学校図書館司書補助員の存在とその活動」、二点目は、「日々の読書活動を充実させるための様々な工夫」、三点目は「日々の授業・校内研修と図書館との連携」である。

主な要因として分析した上記3点について、以下、述べていく。

4 学校図書館司書補助員の存在とその活動（要因1）

（1）学校図書館司書補助員について

君津市では、学校図書館司書補助員が各学校に配置されている。1日約4時間、年間で約90日（週あたり2日から3日）の勤務となっている。

主な担当事項としては、図書の貸し出しと返却、書架の整理、蔵書点検、環境整備、利用者登録や延滞管理の補助、書誌登録や管理の補助などである。そして、この他にも、図書相談（調べ学習や図書資料についての相談）や君津中央図書館との連絡・調整などを行う。様々な担当事項の中で、この「図書相談」と「中央図書館の連絡・調整」は、本校の読書活動の充実に直結するものとなっている。また、校内研修や日々の授業を充実させていくうえでも、学校図書館司書補助員の存在は欠かせない。

（２）学級文庫の配置

本校は校舎の配置上、図書室（２棟）と教室（１棟）のある棟が異なる。そのため、図書室までやや距離がある。そこで、児童がもっと図書室の本を手に取りやすいようにと、司書補助員が、月ごとに２０～３０冊近くの本を選び、まとめて各教室に配置してくれる。



児童は、図書室の本を図書室に足を運ばなくとも、手にとって読むことができると同時に、朝読書の際も、短い時間の中で本を探し、触れることができている。



← １年１組の学級文庫

約３０冊近くの本が毎月各学級に届けられる。

（３）団体貸出しに際しての連絡・調整



５０冊近くの本を団体貸出しとして提供してくれる場合もある。

学習を進める上で、図書室の本だけでは、調べ学習や並行読書を深めることができない……。そのような悩みを教員が持った時にも、司書補助員が対応してくれる。

君津中央図書館に連絡をとり、教員が欲する分野の本を依頼し、団体貸出しとして、学校まで持ってきてもらえるように調整をしてくれる。この団体貸出しで集まった本によって、各教員は調べ学習や国語科の学習における並行読書をより充実させることができている。

何よりも、学校にはない中央図書館の本を、学校にないがらにして手にとれる環境は、児童の読書意欲の向上に結び付いている。

（４）校内研修の充実と学校図書館司書補助員

本校は、校内研修において、国語科の研究を進めている（詳細は、後述にて）。「単元を貫く言語活動」を設定して、授業展開を試みる研究がその中心であったが、その活動を進めるうえで、並行読書は欠かせない手立てである。

その並行読書を進めるにあたって、多岐にわたる本を中央図書館と連絡・調整を通じて、団体貸出しの手続きを踏んでくれるのも、司書補助員である。

並行読書においては、例えば学習材で出合う作者や筆者の作品の世界を広げていく読み方、自然や歴史といった分野ごとの知識や見分を深めていく読み方など、児童は多岐にわたる読みをすることができた。そのような知的に富んだ環境を整え、学びの深化を喚起してくれるきっかけをつくってくれたのが学校図書館司書補助員であった。

つかむ	1	「お話の大好きなところを音読で紹介しよう」という、めあてを持つことができる。「わにのおじいさんのたからもの」の学習計画を立てることができる。	・教師による本の音読の紹介を聞く。 ・「わにのおじいさんのたからもの」を読んで大まかな内容をつかむことができる。 ・初巻の感想から読みの課題を作る。	③ 単元のわかりやすいしりとり
確かめる	2	・おにの子やわにのおじいさんは、どのような人物なのか読み取ることができる。	・おにのやわにのおじいさんの行動から、どんな人物なのか読み取る。 ・似ているところや違うところを見る。	④ 人柄が言葉引きできよう
	4	・わにのおじいさんがおにの子に宝物	・なぜ、おにの子にわにのおじいさんは宝物をあげよう	⑤ おにの

単元指導計画の中に設定される「並行読書」。それを行っていく上でたくさん
の関係図書が必要となる。その本の選定などにも協力してくれる。

5 日々の読書活動を充実させるための工夫（要因2）

ある一定期間や一時的に読書活動を推進、強化してもそれは長続きはしない。日々の常時的な活動こそが、貸出冊数の増加や読書意欲の喚起につながったと捉える。以下において、本校の読書活動を充実させるための手立てを紹介する。

手立ての中には、教員が仕組むものもあるが、そのほとんどは、図書委員会による主体的かつ自主的な活動を通して、実施されている。

(1) 朝の10分間読書

月曜日と火曜日の8時05分から15分の10分間に、全校一斉の朝読書を行っている。他の曜日は基礎学力向上のための学習時間としているが、読書強化月間には、毎日、朝の10分間読書を行っている。

(2) 読書マラソンカード

図書館で貸りた本、自分で購入した本、学級文庫から選んだ本など、読んだ本をカードに記録し、児童一人一人の一年間の読書の「記録」「軌跡」とするものである。



図書室に掲示されている読書マラソンカードの使い方。1年間の読書の軌跡となる。

(3) お話会

学校支援ボランティアの方々による小話や本の読み聞かせを、昼休みに定期的に行っている。1・2年生は年間4回。3年生から6年生は年間3回の計画で実施してきた。ねらいは、「お話を聞く楽しさを味わい、様々なお話を知りたい、出合った本

を読んでみたい」という気持ちへの発展である。



本の読み聞かせの他に、小話や本の紹介もしてくれる。



(4) お話レストラン

毎年10月は、「君津子ども読書月間」である。その間、「君津市子ども読書活動推進計画」に基づき、本校児童がさらに自主的に読書活動ができるきっかけとなるよう取り組んでいるのが、この「お話レストラン」である。

お話レストランとは、職員による読み聞かせである。読み聞かせの他にも、素話や語り、ブックトークなどを行っている。本の読み聞かせや、本の紹介を行うことにより、児童の読書への興味・関心を高めることをねらいとしている。



(5) 読書ビンゴ

お話レストラン同様に読書月間に行っているのが読書ビンゴである。9冊の本を読み終わると、ビンゴとなり、そろった児童には、カードにスタンプを押し、しおりをプレゼントする。自由読書の他に、「日本人作家の本」「環境問題に関する本」「動植物に関する本」など内容を指定した項目も設定し、児童が幅広く多岐にわたって本と出合えるように工夫をしている。



図書室に掲示されている読書ビンゴの進め方。

1か月の間に多岐にわたる読書を促すことが目的。

(6) 読書郵便



読書郵便は、10月の読書月間終了後も、読書への意欲が持続するよう、11月中の約一か月間行っている。自分の好きな本や友達に読んでほしい本を「ゆうびん」形式で紹介し合い、読書への関心を高める活動である。児童は、友達や下級生に向けてだけでなく、教員にも自分の好きな本を紹介してくれる。

本の紹介を通じて、友達関係や異学年間の人間関係も深まる。

葉書裏面には、紹介する本のあらすじやお勧めの理由などを記述。

6 日々の授業・校内研修の充実と図書館の連携（要因3）

日々の授業において、また本校の校内研修の充実（研究教科・国語）において、図書館との連携は切っても切り離せない。言い換えるならば、授業は教室という空間だけで完結するわけではない。その充実、学びの深化、児童の思考の広がりなど、それらを、さらなるねらいとするのであれば、もはや図書館の利用および図書館との連携は欠かせないものと言えるのではないだろうか。

以下、「校内研究と図書」にそって、その連携を紹介する。

校内研究と図書

研究主題

自分の思いや考えを豊かに表現し「学び合う子」の育成
～「単元を貫く言語活動の充実」を図って～

1 単元を貫く言語活動への授業改善と指導の工夫

国語力の中核となる「読解力」を学校で育成するためにあたって、文部科学省は以下のような提示をしている。

学校での取り組み 【3つの重点目標】

【目標①】

テキストを理解・評価しながら「読む力」を高める取組の充実

- i テキストの内容や形式などの「解釈」や「理解・評価」する取組の充実
- ii 「建設的な批判を伴う読み（クリティカルリーディング）」の導入

【目標②】

テキストに基づいて自分の考えを「書く力」を高める取組の充実

- i テキストの内容を「要約」「紹介」する取組の充実
- ii 授業の最後に「自分の考えを簡潔に書かせる」などの機会の充実

【目標③】

様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実

- i 「朝の読書」などの読書活動の推進
- ii 新聞や科学雑誌などを含め、「幅広い読み物」に触れる機会の充実
(NIE活動など)
- iii 「目的に応じた自分の意見」を述べたり、書いたりする機会の充実

本校でも、こうした指導方法を「単元を貫く言語活動」と並行して積極的に取り入れて来た。

2 単元を貫く言語の充実こそが、本に自ら手を伸ばす本質的な国語力の育成と密接に繋がる

「言語活動の充実」というキーワードは、読書指導へのアプローチでもある。

3 「単元を貫く言語活動」 単元活動で学校図書館・地域の図書館を使う

【実践例】

平成27年度校内研究の実際からの図書館資料の主な活用例

学 年	単元名 および 学習材	主な活用方法
1年	「音読劇をしよう」(「けんかした山」)	物語の音読劇
2年	「紙しばいを作ろう」(「きつねのおきやくさま」)	物語の紙芝居づくり
	『ないた赤おに』の続き話を作ろう (「ないた赤おに」)	物語の続き話を書く
3年	「お気に入りの物語を変身ボックスで紹介しよう」 (「モチモチの木」)	物語の多読並行読書 変身ボックス作り
	『物語おすすめカード』で お気に入りの物語を紹介しよう」 (「わすれられないおくりもの」)	物語の並行読書 お気に入りの物語 紹介カード作り
4年	「本の紹介リーフレットをつくろう」 (「一つの花」)	物語の並行読書 リーフレット作り
	「新発見!すごいぞ〇〇ブックを出版しよう」 (「ウミガメの命をつなぐ」)	説明文の並行読書 説明文を書く
5年	「日本の世界遺産についての意見文 『わたしの考え』を書こう」 (「世界遺産白神山地からの提言」)	世界遺産に関する 本の多読 意見文を書く
	「椋鳩十のお気に入りの作品を紹介しよう」 (「大造じいさんとがん」)	椋作品多読 物語のポップ作り

6年	「そっと教えます 説明的な文章の書き方の秘密」 （「ぼくの世界 きみの世界」）	説明的な文章の 書き方 リーフレット作り
	「オリジナルファンタジーを完成させよう！」 （「きつねの窓」「夕日の国」）	ファンタジー作品 多読並行読書 ファンタジー作品 を書く
	「私の大切な一冊のこの伝記 6年1組 名言収録集 ～この人のこの名言に学ぶ～」 （「伊能忠敬」「洪庵のたいまつ」）	伝記の並行読書

単元を貫く言語活動の推進がすなわち、
本に自ら手を伸ばす子どもを育み、
本質的な国語の能力の育成をめざすことになる。

7 成果と課題

<成果>

- 図書と授業の連携・結びつきにより、読書活動と言語活動の両輪が有効かつ相互的に回転をした。**

図書館司書補助員や図書担当の教員が主体となって、並行読書を進めやすい環境を整えてくれた。そのため、国語科をはじめとして、各教科の学習意欲の向上につながった。

- 貸出冊数、読書意欲の向上。**

平成25年度の児童一人あたりの貸出冊数は、35.6冊であった。それが、平成26年度には、52.5冊と大幅に増加した。今年度もそれにせまる貸出冊数である。司書補助教員の活動を主として、図書委員会の常時活動とその工夫などによる成果である。

<課題>

- 校内研修の教科にかかわらず、教員自身が図書館を活用する意識を持ち続けること。**

ここ数年、本校では国語科における「単元を貫く言語活動の充実」のもと、校内研修を進めてきた。単元の指導計画の中で仕組む「並行読書」を通じて、読書活動と授業実践の連携を図ってきた。今後、他教科においても、読書活動と授業の連携を図り、学習を深めていく意識を教員自身が持ち続けることが求められる。

●図書館司書補助員を中心につくられた「本を手に取りやすい環境」に甘えることなく、「読書好きの子」を育み続けることが大切。

(先述したように) 図書館司書補助員によって、児童が「本を手に取りやすい環境」が整えられている。教員は、その環境に甘えてはいけない。これからも図書館司書補助員と、図書担当教員を中心に共同歩調をとり、「読書」の楽しさ、「本」の魅力を伝え続ける必要がある。

実践校訪問を終えて

平成27年11月2日、千葉県教育庁教育振興部指導課学力向上室指導主事 桑原伸幸先生に実践校訪問をしていただいた。本校教諭・鈴木美幸による国語科の授業参観、図書館視察、協議会を経て、様々な指導助言をしていただいた。中でも以下の言葉は忘れられない。それは、

『言語活動のヒントは、図書館にある』という環境をつくってください

という言葉である。

言語活動は基本的には、授業実践を通して教員が仕組む。しかし、言語活動を通じて児童が創り上げたもの（リーフレットや紙芝居、書評集など）を図書館に展示することで、他の児童の目に幅広く触れることとなる。

そういった環境を整えることで、図書館に行けば、本があり、児童の作品があり、言語活動のヒントとなるものがある。学習を進めながら、読書を通して「こういうものがつくれるのか」という意識が児童に滴っていく……。そういう図書館にしていくことが大切ではないだろうかと思えた。

私たちはこれからも、八重原小学校の図書館をそういった「学び合い」のできる空間にしていきたい。



本校図書室前廊下の様子。言語活動を通じて、児童が作成した様々な作品の展示（学校長自作のポップも）を定期的に行い、言語活動のヒント溢れる環境に！

- 1 単元名 私の大切な一冊のこの伝記
「6年1組 名言収録集～この人のこの名言に学ぶ～」
(学習材 『伊能忠敬』『洪庵のたいまつ』)

- 2 この単元でつきたい力

複数の伝記を読み、感銘を受けたり憧れを抱いたりしながら自分を見つめ、自分の生き方について考えながら読む力

【ここでの主たる言語活動】

伝記を多読し、比べ読みや重ね読みをしながら、自分の選んだ伝記の人物の心に響いた名言を取り出し、やがて卒業していく自分たちのこれからの生き方を支える「6年1組名言収録集～この人のこの名言に学ぶ～」をつくる。

- 3 単元について

(1) 単元観

【この単元をこのようにみる】

国語教育、とりわけ読解指導が、文章の不必要なまでの枝葉の詮索に陥り、生きて働く日常の読書力に発展していかないことの問題点として指摘されて既に久しい。

子ども達を自立した読み手に育むことこそが、本質的な国語の能力の育成をめざすことになるのだと私は捉えている。

また、言語活動の充実、読書活動への重要なアプローチでもあると考える。「単元を貫く言語活動」（ここでは、「名言収録集づくり」という単元を通した活動）により、自ら伝記に手を伸ばす子を育みたい。

伝記を読むことの価値は、実在した人物の生き方や考え方に触れることによって、人生観を深めたり新たな発見をしたりすることにある。

「伝記」を読むことは、子ども達にとって即ち、今までの狭い自己の体験や見識を広く豊かにしていくことでもある。自分自身を見つめ自分自身を向上させる成長の糧としていくことはまた、読書の喜びの真髄であろう。

ところが、昨今の子ども達の読書傾向をそのままにしていたら「伝記」に手を伸ばすことはないだろうと思われる。ここにこの単元学習の意味がある。

放っておいたら手を伸ばすことがないであろうこの長い伝記の読み物をどのようにしたら、子ども達が魅力的に読み通すようになるのだろうか。この課題を解決するための一つの読みの対策として、伝記の中の「名言」に着眼したい。「名言」は、その伝記に書かれた偉人の生き方のエッセンスである。この「名言」を学習の中核に据えて偉人の人物像に迫る単元を仕組んでいくことにする。

本単元では、この「伝記の『名言』にはその人物の生き方が集約されている」ことに着眼し、子ども達に自分の心に響いた「名言」を探らせ「名言集」を創るという言語活動を

主軸にし、伝記を主体的に読む愉しみに浸らせたい。

伝記教材の中の人物の生き方は、常に一貫して困難を克服し世のため人のために尽くした業績が語られている。この姿が子ども達の感動を呼び、尊敬と思慕の念をかき立たせるのだろう。しかし、多くは既にこの世を去っている人々の生き方、考え方、業績は、現代を生きる子ども達にとって単なる遠い過去の遺物と認識される懸念もある。こうした懸念を払拭したい。それには、【①自力で読み心を動かされた名言を探る②なぜ、そこに自分は心を動かされたのかを考えながらエピソードを読み取る③読み取ったことをもとに、人物の生き方、考え方を整理し、自分の生き方や考え方を見直す】ことを重要なポイントとしていく。このようにすることで、取り上げられている人物と読み手の子どもを繋いでいくことが可能になると思われる。

こうした学びを主軸に、伝記の中の人物の生き方から自分の受けとめた「名言」を抜粋し、学習のゴールでは学級の皆でその語録を編集していくことにする。

最近、書店やコンビニの書籍コーナーで名言をアンソロジーとしてまとめたり編集したりしたものをよく見かけ、思わず手に取ってしまうことがある。人はただ言葉に感化され影響を受けるものだけということであろう。特に、その人物の名言を入りに伝記を読むことによって、いっそうその人物像が明確になり、より深くその人物に迫ることができるのだと考える。

こうして、その人物の生き方を顕著に表す自分の捉えた「名言」を探し、その偉人に憧れを持ったり生き方を考え合ったりした上で、「名言集」として収録していく。この自分たちの生きる指針となるであろう言語活動は、小学校の卒業期を意識し始めた本学級の子ども達に最適であると考える。

尚、本単元を展開するにあたって、共通の学習材として、教科書教材の「伊能忠敬」と司馬遼太郎によって執筆された「洪庵のたいまつ」（司馬遼太郎記念館出版）の2つを扱う。

「伊能忠敬」は、人生の半分を過ぎてから真に学びたいことに覚醒し邁進した忠敬の業績が時系列によって綴られた伝記である。

忠敬のあきらめない強い気持ちの根底には、人への思いがある。師である高橋至時の役に立ちたいという思いは、やがて忠敬の世の人々の役に立ちたいという強い思いへとなっていく。

年齢にとらわれることなく学び続ける姿はもとより、こうした「世の人々のために」という思いは「洪庵のたいまつ」を読むことでいっそう深く子どもの心を捉えることであろう。

「洪庵のたいまつ」では、「名を求めず、利を求めず、溢れるほどの実力がありながら、他人のために生き続けた」江戸末期の医者緒方洪庵の生きざまが語られている。筆者の司馬遼太郎は、「世のために尽くした人の一生ほど、美しいものはない。」「そういう生涯は、遙かな山河のように実に美しく思えるのである。」と綴っている。

この同じ時代を生きた二人の人物について「重ね読み」したり「比べ読み」したすることで読書の幅を広げ、読みの技能を獲得させるとともに、偉人の偉人である根幹となる「世のために生きる姿」を子ども達とともに追い求めてみたい。

さらに同時に並行読書してきた中から「私の大切な一冊の伝記」を選び出し、共通学習

材と結びつけながら、人としての生き方や考え方を見つけてほしい。

単元の終末には、単元を貫いて個々が構築してきた「偉人の名言」を合本し、もうすぐ小学校を卒業していく自分たちの心の指針にできるような「収録集 6年1組この人のこの名言に学ぶ」を創り上げていくことにする。

(2) 児童の実態 (在籍24名)

子ども達にとってこの「伝記」を読む学習は、6年間の小学校の中でも初めてのことである。日常、読書を好んでする本学級の子ども達ではあるが、「伝記」を手にして読む姿は殆ど見られない。

一学期に「私を支えるこの言葉」の紹介をし合うスピーチを展開した。ここでは24名の皆が、それぞれ自分を支えたり憧れを抱かせたりする「言葉」を大書し学級の友達に伝えることができた。具体的な自分自身のエピソードを添えながら、それらの言葉がどのように自分に関わっているのかを聞き手にも伝わるように生き生きと語る姿があった。

こうしたこれまでの学びをさらに一歩進め、新たな伝記の読みに、人物の名言を中核に据えながら「伝記」を子ども達と繋いでいくことには大きな意味があると考えた。「伝記」の中の名言を中核に据えた学びは、子ども達を主体的に読み考える学びへと誘うだけでなく、既習の言語活動「私を支えるこの言葉」の学びをいっそう確かなものに根付かせ豊かにすることができると思う。

また、多読をする際の「比べ読み」や「重ね読み」の方法については、これまでも幾度か学んできている子ども達もいるが、今年度はこれが初めての学びとなる。

(3) 指導観

【この単元をこのように指導する】

本単元では、まず伝記の多読を求める。伝記というジャンルに興味と関心を持って多くの伝記を読む機会を創り上げたい。その際、これまでの言語活動の充実のための方策と同様に、学校図書館はもとより、君津市中央図書館の利用、図書館司書との連携を図り多くの伝記を用意したい。

実際に伝記を手にとると、子ども達は伝記にもジャンルがあることを知ると思われるが、読む伝記のジャンルは問わないことにする。

後生に名を残す人の人生について書かれた伝記を読むということは、伝記人物の魅力を捉えることが大切である。

まずその功績を時系列にそって正確に読み取ることはもちろんではあるが、最も大切にしたいことは、その中に散りばめられたエピソードの中の「名言」を読み取り、そこにどのような人物像を見出すかということである。伝記には、偉大な功績を残した人物の人生が描かれている。伝記の中の人物がどのような過程を経て後生に残る偉大な功績を残したかについては、いくつかのエピソードの中に散りばめられた「名言」を読み取ることで理解が深まっていくと考えるかえあである。「名言」を核に読み取ることで、その人物像はいっそう明確に浮かび上がってくる。

こうした読みの焦点化を図るためにも、ここでは自分の心に響いた言葉を「名言」として取り上げてさせていく。ここでいう「名言」とは、その人物の言葉はもとよりその人物

像を際立たせる伝記の中の叙述そのものの両方としていく。

自分の捉えた「名言」はまずカードに記載させていく。こうした一連の学びは子ども達に可視できるよう学習の手順を一覧にして配付し、単元学習の見通しを持たせていくようにしたい。

本単元学習では、まず、共通学習材「伊能忠敬」と「洪庵のたいまつ」を重ね読みや比べ読みしながら読み進め、次に、心を動かされた「言葉」を中核に人物の生き方を読み取り、個々の異なる考えを交流し合うことにする。

名言集の書き方については、この共通学習材で具体的に学ぶようになる。

名言集には、偉人の名言とともに、その人物がどのように自分の心を動かしたのかを書きながら人物像を紹介していくような工夫をさせていく。(名言集カードモデル:別添)

その際、偉人の生き方から子ども達が自己否定を強めるような読みにならないよう、そこから何を引き出すかを考えさせ、自分が大事にしてきたことと比べたり、「手本にのしたいこと」「こんなように生きたい」という憧れを持たせたりしながら、向上的な読みへと誘いたい。

さらにここでは、自分の「大切な一冊」となった伝記からその人物の「名言」を探り、一人一人が名言集カードを書き、学級の収録集としていく。

名言集カードについては、単元の導入で教師作成のモデルを示し可視させることで、具体的なゴールのイメージをしっかりと持たせたい。

4 単元目標

○「名言集」を編集することを通して、自分の考え方や生き方について考えようとする。

(関心・意欲)

○伝記の最初から最後まで大筋を理解しながら読み、自己の捉えた名言からその生き方を読み取ることができる。

(読むこと)

5 単元の指導計画(12時間+課外)

過程	時配	目 標	主な学習活動と内容	評価 ◎
一 次	1	・教師作成のモデルカードを見て単元のゴールについて具体的なイメージを持つことができる。	・指導者のモデルを見ることにより、具体的なイメージを持つ。 並行読書	◎単元の見通しを持てたか。
	2	・本単元の学習課題や計画に対して見通しを持つことができる。	・単元の見通しを持つ。 ・共通学習材①(中心学習材)「伊能忠敬」を通読する。	◎見通しを持ち進んで教材文を読んでいるか。

二 次	2	・教科書教材「伊能忠敬」を読み、生き方が集約された名言を探ることができる。	・本文を読み、時系列の年表をつくる。 ・自分の捉えた名言を書く。	◎伊能忠敬の生き方について読み取ることができる。
8	2	・「洪庵のたいまつ」を読み、洪庵の生き方が集約された名言を探ることができる。	名言集づくり ・共通学習材②本文を読み、時系列の年表をつくる。 ・自分の捉えた名言を書く。	◎洪庵の生き方を読み取ることができたか。
	1 本時	・伊能忠敬と緒方洪庵の名言を重ね読み・比べ読みしながら、二人の偉人の生き方の共通点について話し合うことができる。	・名言を中核にし、偉人の生き方の共通点や感銘を受けたことを交流し、自分をみつめ直し自分の生き方を考え合う。	◎二人の偉人の生き方に共通点を見出し、生き方を交流し合えたか。
	3 + 課 外	・伝記を多読し、伊能忠敬や緒方洪庵の生き方と重ね読みしたり比べ読みしたりしながら、自分をみつめる生き方を考えることができる。	・伝記を多読し、それぞれの生き方が集約された名言を探し、自分をみつめなおし生き方を考える。	◎複数の伝記を進んで読んでいるか。生き方が集約された名言を取り出せたか。
三 次	1	・自分の選んだ人物の名言集を作成することができる。	・自分の選んだ人物について重ね読みし、名言集にまとめていく。	◎人物の生き方について理解し自分の考えを持って読んでいるか。
	2 1	・学級の皆で作品の交流をすることができる。	・作品交流をする。	

6 本時の指導 (7/12)

(1) 目標

○二人の偉人の名言を核にしながらかその生き方の根本を探り、読みの交流をすることができる。(読むこと)

(2) 研究の視点との関連

『「名言」を綴った収録集を創る』という単元を貫く言語活動のために、本時では「名言」を核に自分の考えをはっきりと持った上でそれぞれの読みの交流をする。

(3) 展開

時配	学習活動と内容	指導上の留意点と評価◎	資料
3 2	1 司書の紹介する偉人の名言と生き方を聞く。 2 本時の学習のめあてを確認する。	・司書の紹介する偉人の名言を聞くことにより、本時の学びを確認するとともに、より主体的に読み取ろうとする意欲を持たせるようにする。	学習 材
	偉人の名言を核に、二人の偉人の生き方の共通点を探ろう。		
8	3 自力読みの確認をする。 ①黙読する。(個) ②2つの共通学習材である忠敬と洪庵との生き方の共通点を考える。(個)	・自分の読みの内容を伝える読みの範囲を自分で決定し読むようにする。 ・既に自力読みの段階で共通点や相違点に気づいている。共通点には赤の付箋、相違点には青の付箋を貼っている。その付箋に自分の受けたメッセージを再びメモさせていく。	提案 資料
6	【パネラーの提案】 パネラー① 「謙虚で美しい心」 パネラー② 「ただただ人のために」 パネラー③ 「師を持ち敬って学ぶ」	・読みの焦点化や話し合いの焦点化を図るために、パネラーを3名置くようにする。 ・読みの交流が主体的になされるように3名のパネラーの提案内容については事前に配付し、自分の読み取りや生き方への示唆の共通点や相違点についてメモさせておくようにする。 ・自分が強いメッセージとして受け取った「名言」を根拠に、偉人の生き方に対する自分の考えを語らせていくようにする。	
4	【ペア対話】	・ペアになった友達の考えを聞くことにより、「名言」から受けとめたメッセージや生き方に対する自分の考えをさらに深めていくことができるように意識づける。 ・ペア対話で得た新しい気づきや発見を青鉛筆で加筆させ、自分の考えの深まりや変容を自覚させていく。	

- 7 5 学習のまとめをする。
- ①名言カードを見直す。
 - ②今日の学習からわかったことを書く。

二人のその生き方は謙虚である。決していばらず、常に素直な心を持ち、「師」を持ち敬っている。

さまざまな困難を乗り越えられたのは、師を持ち謙虚に学び、自分のことよりもただただ人のために生きようとした強い思いがあったからこそである。

私も、謙虚に学ぶ心を持ち、たとえ小さなことでもよい、人の役に立ちたいという生き方をしたい。

- ・単なる考えの発表会にならないよう、言葉に着目しながら、「根拠」「理由」「主張」の三角ロジックを使って聞き手を納得させていくようにする。また、必ず前の友達の発言に繋げて話させることで、「思考のある交流」をめざすようにする。
- ・名言として自分の受けとめた言葉を比較し合うことによって、違う名言を拾っても、その生き方のメッセージは同じこともあることに気づかせていく。
- ・叙述や名言からその生き方を探ると偉人には共通する生き方の根本があることに気づくようにさせていく。
- ・交流し合いながら、収束できることはまとめていくが、一人の人物がさまざまな側面を持っていることを大事に捉えさせていくようにする。
- ・一人一人が捉える「名言」は、読み手である子ども達の読みの視点や関心による。視点や関心は何を焦点化したかに表れる。自分の考えは曖昧な印象に終えることなく、あくまで具体的な叙述からまとめさせていくようにする。
- ・「名言」とは、その生き方を表す一番印象的な言葉となる。友達の考えを聞きながら、再び「名言」を捉え直させていくことで読みを深めていくようにする。捉えた「名言」に変わりがなければ、本時で得た学びを150字程度でノートにまとめさせていく。
- ◎交流を通して友達の考え方の共通点・相違点を見つけ、人物の生き方に対して共感したり憧れを抱いたりしながら自分の考えを深めることができたか。

名言
カード